

『日本永代蔵』の思想と表現

小 森 啓 助

一

『日本永代蔵』は「大福新長者教」という副題の示すとおり、仮名草子『長者教』になぞらえて、町人の致富・成功、あるいは、没落・失敗の諸相を描こうとする。そして、寛永版『長者教』に代表される町人処世訓の基本が、『永代蔵』では、巻三の一の「長者丸」の方組・毒断にはば要約されていること、その方組・毒断は、一方で勤儉を説き、他方で、贅沢や遊芸・遊興や、かけごと・投機等々を戒める消極的教訓であること、これらについては、いまさらここにいうまでもない。

西鶴は随所で分別くさい教訓を掲げてはいる。方組・毒断に類似したことをお談義式に述べた箇所も多い。没落・失敗ないし不成功の原因の大半が、奢侈・遊興であることにも違はない。しかし『永代蔵』全巻を通してみると、長者教的な消極策で成功し、あるいは、失敗を免れた話は、案外に少ない。「長者丸」の著屋善兵衛の

ほかには、巻一の二の扇屋の初代・巻二の一の藤市・巻五の四の日暮の某・巻五の五の万屋くらいのものであろうか。これに反して、消極一方では成功しない、あるいは、没落せざるを得ない例話の方が、はるかに多いようである。

巻二の二で狂言まわしの役をつとめる醤油屋の喜平次は、一生うだつがあがらず、年末の神鳴で破損した鍋釜の僅かな代金のために予算が狂ってしまう。「正直にかまへた分にも埒は明かず」と一応は考えてもいるが、「身に応じたる商売をおろそかに」しない実直な商人である。その女房もまたつつましい内助の功を励んでいる。しかし、北陸路への舟着場として繁昌していた大津の町に住みながら、土地柄を利用して儲けの多い商売をしようとしてもしない。それだけの能力もなく、問屋町の繁栄を横目に「金銀も有る所には瓦石のごとし」とすましかえている無気力さが、その日暮しの生活に甘んじさせる。喜平次の見聞のなかの「絵馬医者」や、あてがい扶持の「不自由なる世」を送る没落商人も、同様の無気力・無能力型で

ある。卷四の一の主人公夫婦も、「渡世を大事に、正直の頭をわらして、暫時も只居せず」にかせぐけれども、当初は思うようにならない。

喜平次の話の冒頭に「細波や、近江の湖に沈めても、一升入る壺は其通り也」とあるように、無気力・無能力の消極型というのは、要するに人物の器が小さいのだ。卷六の一の年越屋は相当な利発者であった。けれども決して大器ではない。分限になり得たのは、盆の靈祭がすんで川に流される運の葉を拾い集め、これで商売の味噌を包むことを思いついたのがきっかけだったという。人にもめったにいないことだ。西鶴が顔をそむけんばかりにして毛嫌いする「川流れの髪の落ち取る」などの「人外なる手業」（卷四の四）と、なにほどのへだたりもない。庭木の選定にも実用第一でなかなかやかましく、「世の方にかしく」はあったが、蓄財以外のことにかけては全くの世間知らずである。息子の縁談に際して、そのうかつさと非常識さが遺憾なく暴露される。やがてその息子の強要でやむを得ず新築した家屋は、客足をばったりとめてしまった。あとはなにをしてもうまくゆかず、四十年の蓄積が水泡に帰する。「人の出入仕つけたる商人の家普請することなかれ」というのが、ここで作者の掲げる教訓ではあるけれども、普請そのものが悪いとはいえない。妻や息子にまで馬鹿にされる愚鈍さ、姑息な智慧はありなが

ら、いま一步発展の機会をつかみ得ない消極性、つまりは器の小ささが、せっかく蓄えた財産を活用できず、かえってこれにみずからの首をしめる役割を果たさせるに至る。新築の店舗も分に過ぎたのだ。そのところを西鶴は書きたかったのではなからうか。卷六の四の与三右衛門は、淀川に流れてきた漆を拾いあげて長者になるという仕合せに恵まれ、栄華の限りを尽くすが、極めて些細な物惜しみ根性が破滅の動機となる。この話も、奢れる人も久しからずということの例話だとみるのは表面的であろう。「商の心ざしは、根ををさめてふともつ事肝要なり」とあるように、小心・小器では、繁栄を持続し得ないことがいいたいのだ。卷二の五や卷五の一では、遠隔の地に出張する手代が、正直・律義だけでは、人におくれをとり、利を得ることがむずかしいとし、やはり「大氣」を有能の条件としている。

いわゆる二代目が没落する例も、理由はやはり消極主義の罪に帰着する。卷一の二の扇屋の二代目はその代表的なもの。長者教を地であったような親仁の死後、息子は遺産を丸どりにして、親にもまさる始末屋であったが、一周忌の墓参の帰途に偶然拾った一歩金の誘惑で、ただ一回だけ「老いての咄の種にもと思ひ極め」て島原に遊んだのがやみつきとなり、遺産は数年の間に使い果してしまふ。この息子は、二十一にもなっていないながら、局女郎の名を御公家衆の

御名と想ったり、遊里の門を「断りなしに通りましたも、くるしう御ざりませぬか」とたずねたりするほどのうぶな男である。倭約心と純情さ加減では人後に落ちないが、抵抗力も免疫性もたぬ男が、いかに僅かな病毒に侵され易いものであるかを、この話は示している。結びに「身を持ちかためし鎌田屋の何がし、子共には是をかたりぬ」とあるからといって、作者も鎌田屋某の尻馬に乗って、若い息子たちに遊興を戒めたとみるのは、むしろ逆ではないか。勤勉・始末・正直・律義の一枚看板は、事に臨んで愚鈍さとひよわさを露呈する無能無力な小人物のレッテルにはかならない。卷三の五の忠助は、親に似合わず「利発生れおとり」、千貫目の財産を三十年余になくしてしまう。これは別段身持ちが悪かったのではなさそうで、ただ、長年の「無帳無分別」のためのじり貧である。生来の怠け者であって、前の話とは大分違うけれども、少々の遺産があったも、手をごまぬいては、実社会のきびしさのなかで、いずれは落伍者とならねばならない。卷五の三の九介の息子九之助が家をつぶしたのは、父親の吝嗇に近い始末ぶりを「浅ましく思」い、柄にもない反発心を起こして散財したからであったが、これも消極主義の底の浅さを突いた一変形とみることができよう。

どの話をとってみても、長者丸式の処世法に、西鶴は決して共鳴してはいない。はじめにあげた数少ない成功例においてさえ同様で

ある。扇屋の初代（卷一の二）や藤市（卷二の一）にあっては、もっぱら成功後の保身術であり、しかも扇屋の場合、二代目はさきにもたとおりだ。藤市の有名な始末話は、日常の生活態度から、子女の教育・後進の指南にまで及んでいる。真山青果氏が『日本永代蔵』講義でいっているように、「人の鑑にもなりぬべきねがひ」をこめた一個の見識を強調したものと考えられる。だが、これとも、のちに述べるように、大人物の鑑とはみていないと思う。また、日暮の某（卷五の四）や万屋（卷五の五）の章では、成功談そのものは主要なテーマとなっていないのみならず、叙述が簡単で、果して始末・勤勉のみで産をなしたのかどうかわからない。「長者丸」（卷三の一）にしてからが、「四十の陰まで、うかうか暮されし」人に対する「問葉」である。健康人に用はない。病人の治療に試みに与えるものであって、効くか効かぬかさえ未知数に属する。右のほか、卷一の三に出てくる筒落米を掃き集めた老女の貯蓄法は、『長者教』の説くところと類似してはいるが、これもただそれだけが長者となり得た原因ではなかった。仮にそうであるとしても、この話自体、北浜米市の活況を描写したついでので、筒落米にも似た、舞台裏のこぼれ話にとどまる。

消極主義が大成を妨げ、没落をもたらす原因にもなりかねないのに反し、積極主義の失敗はめったにない。『永代蔵』の人物の多くは、なんらかの積極的方策によって活路を見出し、繁栄の基を築いている。

積極的といえはいつも第一にあげられる「才覚」にも、比較的単純な思いつき程度のもものかなり多い。巻一の五の松屋後家は、富突きにヒントを得た方法でわが家を売りに出し、苦境を切り抜けた。こんなのはお愛嬌の余談であるが、まともな出世談でも、さきにもあげた巻一の三の、老女が落ちこぼれの米を拾い集めたことや、子供に銭さしを作らせたこと、「長者丸」（巻三の一）の箸屋善兵衛が、仕事帰りの大工が落してゆく木片を拾い歩いて、これを活用する道を考えてことなどは、思案の末のこととはいえ、本格的な才覚とはいいがたい。巻二の三の新六が、勘当されて江戸へ下る道中、犬の黒焼を狼といつわって路銀をかせき、江戸に着いてからは、都会向きに手拭の切売りを考えた話や、巻四の三の分銅屋が、芝居の近所に、札銭の両替をあてこんだ銭店を出したこと、巻五の二の山崎屋が、いったんは家職の油屋を嫌って没落したもの、これも土地柄を利用して川魚屋に転身し、商売の仕方にも一工夫して成功した話なども、まずは思いつきに近い。もちろん、これらはいずれも、出世の緒をつかんだときのこと、そこからさきは別だ

が、この段階では、どちらかといえば、小才のきいた人たちの話である。成功の原因はそれぞれにみな違うのだから、類型的に分類することは困難である。一人一人について作者がどのような過程を頭に描いていたのかも、臆測を許さないことだけれども、作品の上での力点の置きどころからみると、才覚を働かせた積極成功型といっても、以下にあげる例は、右の人たちとは、いささか類を異にしている。それは、単なる思いつき以上の、才能や識見や根性をもっていた人たちである。人物が一まわり大きい。西鶴が興味をもつのは、いうまでもなく、この種の人物だ。

巻二の四の天狗源内は名だたる「鯨突の羽指の上手」であったが、従来は廢物になっていた鯨の骨から油をとることを考え、ついには多数の漁師と舟を抱える網組の親方になる。一介の漁夫から事業家に発展したのである。つづいて、西宮戎の御託宣でさらに新しい工夫をする。源内は毎年の十日戎に参詣を欠かさなかったが、ある年、遅くから詣って気を悪くしていたところ、帰路の舟にえびず様が乗り移り、うたた寝していた源内に、生鯛に活を入れて長時間もたせる秘法を伝授する、という話だ。「信あれば徳ありと、仏につかへ、神を祭る事、おろかならず。中にも、西の宮を有りがたく」思っていたのだから、なにか特別の御利益でも期待したかのようであるが、実はそうではなからう。世人一般の風習に従って、精

神的な安定を求めるのが本旨であつたと思つ。時刻が遅くてあしらの悪い社人たちに、「神の事ながら、少し腹立ちて」いたりする。鯛の生かし方は神様から授かったものではなく、自分の仕事にあくまで忠実・真剣であり、寝ても覚めても研究を怠らぬ源内みすからが、船中の余暇にふと思ひ浮んだ工夫であつたと解しなければならぬ。作者はこれこそ夢のお告げに仮託したまでである。巻四の一の桔梗屋という染物屋は、正直・勤勉の消極法でうまくゆかぬのに業を煮やし、人の逆手をいって貧乏神をまつる。ところがその貧乏神の「あらたなる御霊夢」に力づけられて、独創的な新しい染色法を仕出し、これがもとで、間もなく分限になつた。ここにも霊夢が登場するが、肝心のところは「柳はみどり花は紅」という、教祖のお筆先みたいな文言で、直接の参考になるものではなかつたはずだ。桔梗屋の成功も、消極主義から翻然として眼覚め、なんとか人のやらぬことをやってみようとした執念のためものなのである。夢に関しては、さきの源内の場合と同様に解釈できる。金餅糖の製法を発見した長崎の町人（巻五の一）や安倍川のちりめん紙子を仕出した呉服屋（巻五の五）なども、同じく自分の仕事に生命をかけて熱中した例にあげられる。

また、巻三の二の皇後の万屋三弥は、荒地で菜種の試作が成功したことから、これを田地として開発することを考え、さらには、

農村経営から上方への船商にまで進出して、西国第一の長者となる。いすれもたつたものではない。一つの事がらに精根を傾けるばかりか、小成に満足せず、次々と新たな目標をめざして進む。忍耐力も発明力も実行力も兼ね備えた男たちである。巻五の三の九介もその一人。五十余歳になるまでは、しがたない小百姓であつたが、年越のいり豆の一粒から不思議に芽が出た収穫をもとにして、ほどなく大百姓となり、栽培法の改善や農器具の発明・改良にも非凡の才能を発揮し、のちには著名な綿商人となつて、榮光の生涯を送つたのである。ただ、九介の場合、右のような積極主義の反面、その生活があまりにも吝嗇であつたことを嫌つてか、西鶴が必ずしも無条件で礼賛していないらしいことは、前節でも触れた。才能も才能だが根本の土台を忘れては無価値に等しい。

鋭敏な触角も商人には重要な武器となる。しかしその武器も、やはり使い方次第だという。巻四の二の、博多の金屋という長崎商人は、不運つづきで悲歎のどん底にあつたとき、くもが巢を作る根気に教えられて、最後の運だめしに、居宅を売り払つて長崎に出るが、僅かな資金では商人の数にはいらない。「一生のをさめ」に丸山に遊ぶと、枕屏風が古筆を張りめぐらした絶品。とたんに「遊興は脇に」して足しげく通ひ、その屏風を貰ひ受けて、大名衆に献上し、御褒美の金子でもとの大商人に返り咲く。のち、その遊女を

請け出して、支度も十分に「願ひの男」に添わせてやり、「一たびは傾城をたらずにといへど、是らはにくからぬ仕かた、其目利、ぬからぬ男」と世人にたたえられたとある。これに似たような話に巻三の三がある。伏見の町はずれに、貧民相手の無慈悲な小質屋を営む菊屋の善蔵は、なにを思ってたか、急に初瀬観音通いを始め、なげなしの大金を投じて、三度も御開帳を願ひ出る。古渡りの唐織の戸帳に目をつけ、開帳による損傷を口実に、新しいのを寄進して、これを申し受けようというのが善蔵の魂胆であった。計略が当たって、一度は儲けたが、この「すかぬ男」は「元来すぢなき分限、むかしより浅ましく」おちふれてしまう。金屋と菊屋と、いずれ劣らぬ目利き者でありながら、作者の扱いは、かように相反する。理由はあながち道義心の有無だけではあるまい。小質屋と長崎商人と、結局はこの両者のスケールの相違に求められるべき性質のものである。才能を生かすだけの器量があるかどうか、これがやはり勝負のわかれ目となる。

巻四の四の、小橋の利助の話は、後者の例である。茶の煮出し殻を買ひ集めて、新しい葉に混ぜて売るといふ悪辣な方法を考えつくが、「天、是をとがめ給ふにや」、やがて精神錯乱をきたし、悲惨極まる最期をとげる。この男が売り出した最初は、毎朝「玉だすき・くくり袴・烏帽子姿おかしく、煎じ茶を売り歩き、」るびすの朝

茶」のキャッチ・フレーズで顧客の人気を集めたことにあるという。「才覚男」も実はこの程度、四十までは「物入を算用して」女房も呼ばぬ。「毎日の入舟、判金菴枚ならしの上米あり」といわれた「北国の都」敦賀の住人にしては、なんといつても粒が小さく、人間ができていない。悪辣ぶりよりも、これを指摘したいのが作者の真意ではなかったかと思う。

くどくどいう必要はないかも知れないが、スケールの大きさをもっと端的にたたえた例を二三あげてみよう。巻六の三の、堺の小刀屋という裕福な長崎商人が、ひとり息子の命を救ってくれた医師に法外な謝礼をしたことを、「此氣、大分仕出し、家さかえしとなり」と評している。淀の与三右衛門（巻六の四）の物惜しみと好対照だ。巻一の一の網屋は、江戸の船問屋であったが、初午詣でに泉州水問寺を訪れ、「利生の錢」を一人で一貫も借り受ける。前代未聞のこととあつげにとられる寺僧たちを尻目に、名前も告げずに立ち去ったが、彼はこの錢を基金に、漁師の出船を祝って貸してやり、十三年の後、規定どおり「一年一倍」の複利計算にして、東海道の通し馬も豪勢に返納し、寺中の喝采をあびた。この話も、信心の余得と利息の恐ろしさを語るものと解されやすいが、果してそうであろうか。観音信仰の無意味なことは、ここでも「戸帳ごし」の「あらたなる御告」で、観音みずからが仰せられる。利息の馬鹿にならぬて

とはそのとおりとしても、網屋自身は、この錢で一文の得もしていない。むしろ若干の持ち出しがあったはずだ。彼は以前からすでに「舟間屋して、次第に家栄え」ていたのである。観音の錢は、縁起を喜ぶ漁夫たちの単純な心理を読んで、自己の勢力拡張・人心掌握の道具に使ったものとみられよう。野間光辰氏は、江戸灣を中心とする関東方面の漁業は、江戸初期以来、優秀な漁法を伝承する紀州・泉州などの上方漁民の進出によって開発され、その成功者は、魚問屋や船問屋になって、仕込み金を漁民に貸付けることも行なわれていたから、網屋もおそらく泉州出身の船問屋で、水間寺の種錢貸しを利用したものであろう、と推定されている（日本古典文学大系『西鶴集・下』補注）。とすれば、彼のこの、故郷に錦を飾った、どきもを抜く快挙は、一か八かの冒険もともなつたであろう開拓者たちの血に流れる、太っ腹な精神の発露であつたのだ。西鶴が『永代蔵』の開巻冒頭にこの話をもってきたのも偶然ではない。

巻一のは、三井九郎右衛門が、商売のむずかしい時世にもかかわらず、江戸駿河町にいわゆるデパート式の呉服店を開き、現金売・掛値なしの新商法で客を集めた話である。九郎右衛門のやり方は他に例のない独特のもので、まさに積極主義者の典型とみられる。『永代蔵』のなかで最も重要な人物の一人だと思ふが、これについては、藤市（巻二の一）の消極主義と比較して、あとで述べる。と

『日本永代蔵』の思想と表現

もかく、「手金の光」も十分あったことだし、商才にかけても卓越していたのはもちろんであるが、西鶴が「大商人の手本なるべし」といったのは、そういうもの一切を包括した、九郎右衛門の人物そのものに対する評価であると考えられる。

三

『永代蔵』に書いた人物を通して、町人階級の致富・没落の原因がどこにあったと西鶴はみているのか。これが、作者の抱く人間観・世界観を解明する有力な手がかりとなり、この作品の本質を考究していく上で欠かせない作業ともなると考え、つごうのよい話だけをつまみあげたといわれないう、紙幅の許すかぎり多くの例話をあげて、私の率直な読みとり方を述べてみた。こういうことは本書を論ずる多くの人によってつねに問題にされている。それらには、いろいろ教えられるところもむろん多いけれども、納得しがたい所説もまた少なくないことを感じ、いくらか違った見方をしてみたのである。成功の要諦は勤勉・貯蓄にある、それにもまして智慧・才覚がなければならぬ、資金も大切だ、幸運にも恵まれねばならない、贅沢は禁物だと、口をすっぱくしていつている。だが、もしそれだけで終始しているのであれば、所詮は抽象論であることを免れない。西鶴は、『長者教』なんかと違って、これらが複雑にからみ

あう実相をくまなく把握する。具体的には、そこに人間が介在し、その個々の人間の「人物」によって、才覚や幸運が生かされもし、殺されもする。たびたびくりかえしたように、これが作者の致富論の根本であろう。抽象的なお説教や世相談ではなく、人間が導入された。『永代蔵』が文学たり得た所以もここあるかと思う。もちろん、作者のこういう人間のとらえ方に、とりたてて特異としなければならぬ。「思想」があるわけではない。才覚や資本がひとり世間に歩き出すのではないのだから、いわれてみれば、極くあたりまえのことなのだ。

ところで、こういう考え方に到達するまでの、私の読み方そのものが、あるいは、あまり勝手すぎるといわれるかも知れない。再び作品にあたってみることにする。

『永代蔵』を読むと、文章表現の上で、かなりきわだった二つの型があることに気がつく。一つは揶揄的・嘲笑的な書き方、もう一つは共鳴的・賛美的な書き方である。そして、結論をいえば、この二つが、それぞれ、作者の否定する人物と肯定する人物とに使われられているということも、またかなりはっきりしているのではありませんか。

まず前者、揶揄的・嘲笑的な方から例をあげよう。巻一の二の若い二代目が、金を拾って島原へ届けに出かける前後の描写は、『永

代蔵』のなかでも指折りのところとされる。いかにも小心翼翼たるこの男の面目が目につるようで、ユーモラスな光景が思わず微笑を誘う。が、それよりも前に、作者がこの男をどう待遇しているかをみなければならぬ。

今の都に住みながら、四条の橋をひがしへわたらず、大宮通りより丹波口の西へゆかず、

諸山の出家をよせず、諸半人に近付かず、
すこしの風気、虫腹には自棄を用ひて、

若い時ならひ置きし小謡を、それも両隣をはばかりて、地声にして、

灯をうけて本見るにはあらず。

一生のうち、草履の鼻緒を踏みきらず、釘のかしらに袖を破らす。

これらはこの男の親仁のことであるが、一代に二千貫目も「しこため」た、その極端な始末ぶりが、いかに深い嫌悪の気持をこめて書かれていることか。死後、その息子、すなわち、この章の主人公は、

あまたの親類に所務わけとて箸かたし散らさず、七日の仕揚、

八日目より藪門口を明けて、世をわたる業を大事にかけて、腹のへるをかなしみて、火事の見舞にもはやくは歩まず。しいはい

せんきよくとしくれて、明くれば去年のけふぞ、親仁の祥月とて、且那寺に参りて、下向になほむかしをおもひ出して、泪は袖にあまれる。此の手袖の基盤嶋は、命しらすとて親仁の着られしが、おもへばをしき命、今廿二年生き給へば、長百なり。若死あそはして大ぶん損かなと、是にまで欲先立ちて……

というような人間としてまず紹介される。親の死も命日も、損得勘定をはなれては実感に迫ってこない男なのである。本章の話は、こういう人間を主人公にして展開してゆく。彼はここで徹頭徹尾愚弄され続ける。ということは、読者が滑稽を押しきれない一つ一つの動作やことばに、親子二代の吝嗇に対する、作者の限らない軽蔑と嘲笑がこめられているのである。同じことは、

森山玄好といへる人、かたのごとく薬師は上手、殊に老功なれ共、叡の山風程の事にも、かつて薬まはらず。門にものまうの声絶えて、内に神農の掛絵も身ふるひして、万の紙袋の書付はこりに埋れ、冬も羽二重のひとつへ羽織、せんじやう常にかはらぬ衣裳つき。医師も領城の身に同じ、呼はぬ所へはゆかれず。宿に居れば外間あしく、毎日朝脈の時分より立出でて、四の宮の絵馬をながめ、又は、高観音の舞台に行きて、近江八景もあさゆふ見てはおもしろからず。……人には絵馬医者といはれ、口をしかりし。(卷二の二)

『日本永代蔵』の思想と表現

むかし、難波の今橋筋に、しはき名をとりにて分限なる人、其身一代独り暮して、始末からの食養生、残る所なし。此人も男ざかりに、うき世を何の面白い事もなく果てられ、其跡の金銀御寺へのあがり物、四十八夜を申してから役に立たぬ事なり。され共、年久敷内蔵に隠れ、世間見なんだ銀が、人手にまはりて、九軒の二日払ひの用にも立ち、道頓堀の座払ひのたより共なる。宝といふ字の消ゆる程、今は世のすれ者となりけると、大笑ひせし。(卷三の四)

などについてもみられる。あとの例の「しはき人」は、「大笑ひ」されたのち、前身が頼朝から西行法師にたまわった黄金の猫であったから、自分では金を使えないはずだと追い討ちをかけられる。西鶴が好意をもっていない人間、もしくは、期待をかけ得ない人間が、どういう描き方をされているかがわかると思う。例をあげればきりがなが、ユーモラスな表現というのは、この種の人物に対する作者の揶揄・嘲笑、そして憐憫・軽侮・失望のあらわれなのだ。そうだとすると、消極主義者のなかでは最高の待遇が与えられ、ある程度の畏敬の念さえ払われているかのような、例の藤市(卷二の二)も、西鶴にとっては、決して期待のもてる人間像ではなかったことがうかがえるのではなからうか。本章にみえぬユーモアはここに紹介するまでもないが、これほどになると、西鶴にもあるいは

ひそかな嗜虐趣味があったのではないかと疑わせるほどだ。小橋の利助（巻四の四）のあの凄惨な最期も、悪徳に対する懲罰というよりは、利助の人物そのものへの不満を表現するものとみてよからう。

四

ところが一方、作者の肯定する人物や場面になると、文章が一変する。

惣じて北浜の米市は、日本第一の津なればこそ、一刻の間に、五万貫目のたてり商も有る事なり。その米は蔵々に山をかさね、夕の嵐、朝の雨、日和を見合せ、雲の立所をかんがへ、夜のうちの思ひ入れにて、売る人有り、買ふ人あり。壹分貳分をあらそひ、……空さだめなき雲を印の契約をたがへず、其日切に、損徳をかまはず売買せしは、扶桑第一の大商人の心も大腹中にして、それ程の世をわたるなる。難波橋より西見渡しの百景、数千軒の間丸藁をならべ、白土、雪の曙をうばふ。杉ばへの俵物、山もさながら動きて、人馬に付けおくれれば、大道轟き、地雷のごとし。（巻一の三）

活気に満ちた北浜の風景と、大阪町人の「大腹中」とが、調子の高い、張りのある筆致で、誇らしげに描写される。文字が躍動してい

る。積極型人物は、その性格や行動や事績にしても、活躍の舞台上にしても、つねにこういった調子の文章でいきいきとわれわれの眼前にあらわれてくる。紙面のつこうで多くの例をあげる余裕がないが、さしあたり、巻一の一をみてもよい。水間寺に立ちあらわれた網屋が、風体こそ野暮ったいが、うろたえるばかりの田舎坊主を相手ともせぬ態度、返済のときの堂々の威容。お得意の計数がとび出しているのも、作者の喜悅を示すものか。仮に首章を選んだままで、文章の例としては実は必ずしも適切ではないが、それでも、西鶴がどれほどの種の人物に共鳴を感じ、期待をかけ、称賛を惜しまなかつたかが、文章の側からも推測できるのである。

三井九郎右衛門の江戸駿河町の店（巻一の四）はどうか。

面九間に四十間に、棟高く長屋作りして、新棚を出し、万現金売に、かけねなしと相定め、四十余人、利発手代を追ひまはし、一人一色の役目。たとへば、金襴類一人、日野、郡内絹類一人、羽二重一人、沙綾類一人、紅類一人、麻袴類一人、毛織袋になる程、緋縷子鐘印長、竜門の袖覆輪かたくにても、物の自由に乗渡しぬ。殊更、俄か目見えの熨斗目、いそぎの羽織などは、其使をまたせ、数十人の手前細工人立ちならび、即座に仕立て、これを渡しぬ。……いろは付の引出しに、唐国、和

朝の絹布をたたみこみ、品々の時代絹、中将姫の手織の蚊屋、人丸の明石縮、阿弥陀の涎かけ、朝比奈が舞鶴の切、遠磨大師の敷蒲団、林利靖が括頭巾、三条小鍛冶が刀袋、何によらず、ないといふ物なし。万有帳めでたし。

その斬新な経営法と殷賑を極めた商いの景況が礼賛される。同類事項が多数列記してあるのは、必ず作者の頭が連想を追ってめまぐるしく回転している場合であり、矢数俳諧に氣勢をあげたのと同じ得意満面の表情が偲ばれよう。特に、「いろは付の引出し」以下の例の修辭法がどういうときに使われるか、たとえば『西鶴諸国咄』の序文およびその巻三の六「八疊敷の蓮の葉」を想起すればよい。珍事奇聞の列挙は、視野の拡大、固定的・観念的見地からの脱出の必要を訴えたものと、重友毅氏もいわれる（『近世文学史の諸問題』所収「西鶴諸国咄二題」）。この場合もまた、非現実的な珍品を借りて、何人も未だ考えつかなかった奇抜な着想と、思い切って実行に移した決断力を称揚し、そしてその根底にある店主の人物の偉大さを立証するものにはかならない。西鶴の表現方法を知る好個の例であらう。

モデルは、周知のとおり、三井八郎右衛門の越後屋であるが、中田易直氏の『三井高利』によると、実は、その父・八郎兵衛高利が一切の指図をしていたというから、九郎右衛門すなわち高利の分身

とみてよい。家訓・家憲類によって知られる高利は、健全・誠実な町人倫理を貫いた典型であったという。遊芸・奢侈・娯楽・勝負事をしりぞけ、邪欲・非法・投機を戒め、勤労と儉約と正直に徹し、適正利潤をモットーにして、信用第一の奉仕につとめた。「御用は商いの余情」と心得、権力と結んで御用商人化することには極力批判的であった。こういう商人道をみずから実践して、古い型の因襲的な商業慣習を打破し、変革期のチャンピオンとなることに成功したのである。中田氏は、この時代の町人を二つに大別する。投機を好み、遊興と奢侈にふける種類の町人と、もう一つは、正直と勤儉を愛し、享楽を抑制する堅実な町人と。後者が、貨幣商品経済の発展してゆく機構のなから着実に成長してくる町人層で、三井高利はその代表的人物であったとする。

しかし西鶴は、三井九郎右衛門の高利を、必ずしもこのようにはかりみていたのではあるまい。興味をもった点が別にある。そもそも、高利の伝記から、堅実な倫理性と合理的経営法のみを抽出することは間違っていないよう。旺盛な闘志と敏活な柔軟性は、中田氏もとよりこれを見落してはいないが、場合によっては一家の浮沈をかけて大ばくちを打ってみる気概も、発展の裏面に必ず隠されていたものと推察して、誤りはなからうと思う。「江戸店持」は高利の若い時からの宿願が実現したわけで、三井家発展史上の一つの画期的

な業績であるが、それは決して楽々と獲得された勝利ではなかった。現に、越後屋の新商法に反感を抱き、その繁栄を嫉妬する同業者仲間が、頑強な妨害を加えた。ときには生命の危険をさえ覚悟しなければならなかったという。そんなことはむしろ小さい危険であって、長い苦闘の生涯にはもっとも大きな危険がたえず待ちかまえていたはずである。高利は、碁・将棋やかげごとを楽しむ者に、商いそれ自体の道楽をすすめる。商人ならば、願わくはそうありたいものだ。心から楽しむ商売がしてみたい。が、悲しいかな、常人には楽しむ余裕など生じない。失敗を恐れていては、消極・小心にならざるを得ないのだ。楽しみはおのずからほかに求められる。さる碁・へぼ将棋・麻雀の類が凡俗を誘惑する秘密がここにある。盤上や卓上でしか味わえない勝負の醍醐味を、高利は自分の生涯をかけて味わい尽した。興隆の原動力ともいうべきこの側面を、西鶴が知らなかったとは思えないにもかかわらず、いや知っていたればこそ、『永代蔵』では、ただ、絢爛たる場面が絢爛たる文章で描写されるのだ。三都にわたる三井の多角的な事業についても、その片鱗にさえ触れない。高利の人物とその業績とを一点に集約して、最も効果的に表現したのがこの文章なのである。

九郎右衛門の場合と全く対称的なのが、藤市こと藤屋市兵衛（巻二の一）であろう。その始末話が嗜虐的ユーモアをもって記されて

いることは前に触れたが、藤市とても、もともとはそういう人間ではなかったらしい。『町人考見録』（『日本経済大典』所収）によると、別家した当初、僅かな手銀で長崎商いを志したが、それでは商売にならぬからとて、その「器量」を見込んで資金を貸す人もあったという。また、はるばる長崎に下っても、虚勢をはって高値の唐物を買つことなどせず、ときには、かわりによそで安い穀物を仕入れて帰ったりする「変に応ずる働き」もあった。实在の藤市はそういう人で、商魂も商才も十分な、積極型の人物である。大体、長崎や江戸などに出かける商人は、そのことだけでも、西鶴にその器量を認められている例が多い。三井八郎右衛門もそうだったろうし、藤市もそうであるはずだった。しかし、彼は一転して京都に隠居同然の生活を送り、「借屋大将」なんかに甘んずる消極型になりさがつて、始末話のみが世上に有名になったものか。もはや期待をかけるわけにはいかない。その見識に対しては感服しながらも、心からの共鳴は感じ得なかったのだろう。藤市の履歴から、活動的な部分はあっさり抹消してしまい、半ば伝説化した始末話に、いわば一種の筆誅を加えたのが、この『永代蔵』の一章となったものと思われる。藤市の家は三代目にして早くも大名貸に倒れ、一方の三井家はますますその組織を拡大してゆく。同じく新興町人といっても、天地の相違だ。ともに西鶴の与り知らぬ、のちのことである。経営学

的な診断を下したわけでもむろんないけれども、この相違を直観的にかきわけ得たのが、文学作家の勘というものであろうか。

五

以上は、『永代蔵』で西鶴がなにを書きたかったかを、文章表現との関連でみてきた。さて、西鶴はどういうつもりでこういう作品を書いたのか。

『永代蔵』の人物には、モデルのはっきりしているものもある。また全くの創作もあろう。しかし、いずれにせよ、作者の見聞がもたれていることにはかわりはないはずである。

世間のひろき事、今思ひ当れり、万の商事がないとて、我人年々くやむ事、およそ四十五年なり。世のつまりたるといふうち、丸裸にて取付き、歴々に仕出しける人あまたあり。米壺石を拾四匁五分の時も、乞食はあるぞかし。つらつら人の内証をみるに、其家それ／＼に、諸道具をこしらへ、むかしよりは、おしなべて物ごと十分になりぬ。尤も、家やぶる人もあれど、家ととのへる人まされり。(巻六の五)

といている。「およそ四十五年」というのは、四十五年前に歴史の上これこれの事実があったというよりは、彼自身が生をうけてからの年数を漠然といったものと思う。それは、寛永末年頃から、明暦

・万治・寛文・延宝をへて天和・貞享に至る長い年月である。社会的・経済的変動ももちろん激しかったが、たびたび書かれているとおり、概していえば、世間がつまり、思わしい儲けのできない時代になってきていたのである。右の引用では、そうでもないような書き方だけれど、後半については、すぐそれに替く文章でわかるように、単に市中に人家がふえてそれぞれに生活していることくらいが「其ためし」なのである。ポイントは、「万の商事がない」状況にもかかわらず、「世間の広き事」に、長い間には、成功者もまた案外あるもの、ということところにある。『永代蔵』の成功者は、その、案外多いようでも数少ない部類の人たちだといつてよい。

天和・貞享期が、はなやかな上昇・好況の時代ではなく、下降・不況の時期であり、西鶴の作品がそういう時代を背景にして作られていることは、すでにしばしば指摘されている。なかでも野間光辰氏は『西鶴と西鶴以後』(『岩波講座・日本文学史』)で、このことと関連して、『好色一代男』の「転合書」について示唆深い見解を提示された。野間氏は「転合」を「根源的には、充実した生命力の自然の発露、もしくは確立された自我の自由な表出が、何等かの規制を受けて阻害される時、その救拔・解放の欲求として狂的にあらわれる」癡、狂すなわち一種の狂気であると規定し、外からの抑圧ばかりでなく、環境に対する順応や周囲との調和を教える生活の智慧

は、内からも強く自己に対して制肘を加え、救拔・解放を求める欲望はどす黒く内にくすぶって、物狂おしさをさえ帯びてくる、その狂気が『一代男の』筆をとらせたのである、という。そしてその狂気の根源を、打続く天災地変にもまして人々を震えあがらせた綱吉の恐怖政治に求め、『一代男』の最後に女護の島渡りを設定したのは、それが鳥も通わぬ流刑の島・八丈島であったことを思えば、いわゆるような飽くことを知らぬ享楽の追求なんかではなく、反対に、世之介の深刻な不安と絶望をあらわすものであり、西鶴自身もまた、この不安と絶望を身をもって体験したからにはかならない、とされている。これに対して高橋義孝氏は「『好色一代男』の問題若干」（『国文学・解釈と鑑賞』昭三八・三特別寄稿）で、野間氏自身明確に意識しない社会学主義的芸術観にわざわざいわれて、「転合」の意味を拡大解釈したと批判し、中島随流の使った「放埒」という語が西鶴の本質を理解する上でより適切である、女護の島渡りは、西鶴があえてした数々の放埒を上まわる放埒中の放埒なのだ、といっているが、自己救拔を求める狂的な欲望のあらわれを「放埒」と置きかえたこの意見が、立場の相違はともかくとして、野間氏の所見をさほど大幅に修正するものとは考えられない。

私は、『永代蔵』もまた『一代男』と同様、深刻な絶望感に襲われた西鶴の心に鬱積する欲求のほどはしりではなかったかと思う。

表面的には、

古代にかはって、人の風俗次第書になって、諸事其分際よりは花廳を好み、殊に妻子の衣服、また上もなき事共、身の程しらす、冥加おそろしき。……此時節の衣裳法度、諸国諸人の身のため、今思ひあたりて、有りがたくおぼえぬ。商人のよき繕きたるも見ぐるし。袖はおのれにそなはりて見よげなり。武士は綺羅を本としてつとむる身なれば、たとへ無僕のさぶらひまでも、風義常にしておもはしからず。（巻一の四）

と、町人抑圧政策の一つである衣裳法度にも随喜する。泰平の御代を謳歌するかのような発言もところどころにみられる。あるいはまた、

五十年の内外、何して暮せばとて、成るまじき事には非ず。

（巻四の四）

生あれば食あり。世に住むからは、何事も案じたるがそんなり。（巻四の五）

などと、なりゆきまかせに傾く。その一方で、不況の時代なのに、勤儉力行・智恵才覚で財産を築きあげた例話を紹介するのである。しかし、世の中は決して、さようにありがたがるわけにはいかず、一個人のささやかな努力や才能をもってどうにでもなるものではない、あるいはどうにかなるものでさえないことくらい、知りすぎる

ほど知っていたであろう。人々をそうさせたきびしい政治のあり方に盲目であったはずもない。政道批判めいたことは一かけらも出てはいないが、いうまでもなく、当時の作家にそれを責めることはできない。口に出してはいないが、いくらかでも体系的な社会認識があったかといえは、それも疑わしい。

けれども、こういった楽天的な、ときには迎合的な口吻のなかへ、逆に、作者の限らない悲痛な叫び声を聞きのがし得ないのではなからうか。広末保氏は、金銭の世界に町人の可能性を追求しようとした意図が実現しなかったといわれる(『元祿文学研究』)。ことばじりをとらえるようだが、可能性というものはもともとなかったのであろう。実現困難であることははじめからわかっている。西鶴が自分の眼でみ、自分の肌でじかに感じとった現実がそうなのだ。暗黒の時代に成功し得た人は、実は極めて稀な例外だったというべきである。幸運か天分か才能か、いずれにせよ、なにかに特別恵まれた人である。でなければ、爪に火をともした吝嗇家だ。消極型・積極型のいかんを問わず、読者が処世上の範とし、自分もまたかくありたいと望んだとしても、簡単にそうはいかない話なのである。失敗者の例も、前車のわだち以上の参考にはならない。注意さえすればくつがえらぬという保証はない。もうもうの話はず、いくら聞かされても、実際にはあたかも鏡にうつる虚像のごときものでしかなかった。事実、多くはすでに過去の話だったといわれる。

『永代蔵』も一つの「転合書」であったといえよう。現実には満たされたい作者の欲望が狂奔するとき、たとえばあの越後屋店頭の写真となってあらわれる。弁舌・手だれ・智恵・才覚の限りをつくし、生牛の目をもくじる敏捷さと、朝夕に星をいたたく勤勉さをもってしても、金利にもならぬのが、「京の出見世」一般の実情であったという。そういうなかでの越後屋の成功である。読者町人も、作者とともに、思わず歓声をあげようとしたかも知れないが、いかなせん、虚像はあくまで虚像にとどまる。百人に一人の話では実像を結はない。そうと知りつつも、なおあえて書きとどめざるを得なかった西鶴に、現実に対する深い絶望感をみたい。

それは、無言のうちに政治を批判した、当時としては、いわゆるきりきりの抵抗であったなどといえるのかも知れない。しかし、念のため断っておくが、たとえこの小稿で述べたことが間違っていないと仮定しても、そこから直ちにこのような結論を導くのは、少しせつかちな断定に過ぎるであろう。『永代蔵』執筆当時の西鶴がどういう世界観をもっていたか、実のところ、私にはまたよくわからない。

天道言はずして、国土に恵みふかし、人は実あって偽りおはし。其心は本虚にして、物に应じて跡なし。……

このかなり難解な巻頭書き出しの文章は、そのまま『永代蔵』の難解さを象徴するもののようにである。